



2016年2月10日放送

頻用処方解説 小柴胡湯加桔梗石膏

福岡大学病院 東洋医学診療部 鍋島 茂樹

基本となる小柴胡湯

小柴胡湯加桔梗石膏は小柴胡湯に桔梗と石膏を加えた方剤で、扁桃炎、中耳炎、リンパ節炎、気管支炎など、主として頭頸部・上気道領域の炎症性疾患に用いられることが多く、エキス剤としても処方できます。まず基本となる小柴胡湯について解説し、次に小柴胡湯加桔梗石膏についてお話しします。

小柴胡湯は、漢方医学で少陽病といわれる病態に使用される代表的処方です。また、柴胡剤とよばれる柴胡を主役とする方剤群に属します。小柴胡湯の出典は西暦2世紀頃にできたといわれる『傷寒論』です。『傷寒論』は、当時社会に多大な影響を与えていた急性熱性疾患、いわゆる「傷寒」に対する治療をまとめた漢方医学の古典ですが、現在は傷寒だけでなく、さまざまな疾患に応用されています。

小柴胡湯の特徴

『傷寒論』によると、小柴胡湯は「傷寒にかかり数日たち、なお寒気と発熱を繰り返し、胸と脇腹が苦しく、喉がかわき、首から肩にかけて筋肉痛があり食欲がないものに対して効果がある。」(意識)と書かれています。『傷寒論』では、病は表、つまり皮膚や頭・四肢といった体の表面から、裏、つまり腹部内臓へと入っていくと考えられています。小柴胡湯が受けもつ少陽病は半表半裏といって、その中間、つまり横隔膜周囲の臓器から胸、さらにのどのあたりまでに病気の首座がある場合です。胃炎や、慢性肝炎、胆嚢炎、肺炎、胸膜炎、気管支炎、咽頭炎などが適応です。しかし実際には、特に障害されている部位・臓器は不明であっても、弛張熱が続く亜急性の発熱や不明熱といわれる長期間続く発熱疾患にも使用されることがあります。おおざっぱに言えば、急性から亜急性の炎症性・消耗

性疾患に使用される方剤です。

小柴胡湯の構成生薬

小柴胡湯の構成生薬は、柴胡、黄芩、半夏、大棗、人参、甘草、生姜の7味からなります。

柴胡は、この方剤の中心となる生薬です。セリ科植物の根で、有効成分はサイコサポニン、サイコゲニンと考えられ、薬理作用は抗炎症作用、脂質代謝改善作用、中枢神経抑制作用、解熱鎮痛作用などがあります。抑肝散や柴胡加竜骨牡蛎湯、四逆散、加味帰脾湯といった柴胡剤は不安障害や神経症に使用されますが、これは柴胡の中枢神経抑制作用を応用したものとよいでしょう。

黄芩は、柴胡とともに小柴胡湯の骨格となる生薬で、主成分はバイカリンと言われています。抗炎症作用と抗アレルギー作用、胆汁分泌促進作用を有しており、柴胡と黄芩が協働して、おそらく細胞性免疫系を中心とする免疫系に強く働いていると考えられます。ちなみに黄芩を含む方剤は、間質性肺炎の合併を来すことが知られており、長期間服用させる時は咳や呼吸困難などの呼吸器症状の出現に注意が必要です。

半夏はカラスビシャクという雑草の地下茎で、制吐作用を有しています。大棗はナツメの果実で甘草とともに構成生薬を調和し、方剤の味を甘く調え、副作用を軽減すると同時に精神を安定させる作用があります。人参は多くの薬理作用を有していますが、消化機能を高め、嘔気や食欲不振を改善し、滋養強壮作用、つまり補気が中心で咳を鎮める作用もあります。生姜はショウガのことで、健胃作用、制吐作用があります。

小柴胡湯の適応

これらの構成生薬を見ますと、麻黄のように発汗させる、大黄のように瀉下させるような強い薬は入っていないため、短時間での劇的な効果はのぞめませんが、呼吸器や上部消化管、肝臓の炎症や感染症といった疾患にターゲットを絞った方剤になっているのが分かります。総じていえば、扁桃炎、気管支炎、肺炎、胸膜炎、気管支喘息といった呼吸器疾患や、慢性肝炎、急性胃炎、機能的胃腸症、消化性潰瘍などの上部消化器疾患、またウイルスによる伝染性単核球症やリンパ節炎、リケッチアやクラミジアなどの非定型菌感染症、結核や非結核性抗酸菌症など、多数の急性から亜急性の炎症性疾患が適応となります。さらには原因が分からない「不明熱」といった、全身の発熱性疾患に使用することもあります。

小柴胡湯加桔梗石膏の生薬構成

さて、次に小柴胡湯加桔梗石膏について説明します。本剤は江戸時代に創られた処方で、創始者は浅田宗伯（1815-1894）や華岡青洲（1760-1835）などといわれていますが、詳しくは分かっていません。

桔梗の根は古くから咽頭痛に使用されてきました。特に細菌による化膿性疾患に対して「排膿をうながす」作用、「腫れをとる」作用があるとされています。部位としては頭頸部・

呼吸器領域あるいは皮膚の化膿性疾患に単独ではなく他の薬剤に配合して使用します。例えば、清肺湯、竹筴温胆湯、荊芥連翹湯、十味敗毒湯など化膿性炎症を対象にした方剤に配合されています。感冒程度の咽頭痛であれば、桔梗湯という桔梗と甘草のみの方剤が奏効します。

次に石膏です。薬理的にはまだ分かっていないことが多いと思いますが、古くから局所の炎症をとり、熱を冷ます、いわゆる清熱作用があるといわれています。おそらく熱性疾患におこる脱水に関係していると思われますが、口渇、つまり口の中の乾きも使用目標となります。熱のある炎症部位を冷ますイメージの薬になります。こちらも炎症性疾患、脱水状態などに用いる麻杏甘石湯、越婢加朮湯、消風散、白虎湯などに配合されています。

小柴胡湯加桔梗石膏の適応

以上を総合すると、小柴胡湯加桔梗石膏は、小柴胡湯の証で局所に強い炎症や化膿を有するような病態に使用するということとなります。呼吸器領域の化膿性炎症疾患である咽頭炎、扁桃炎、気管支炎、肺炎、胸膜炎、さらに耳鼻科領域の副鼻腔炎、中耳炎などがよい適応です。また、少陽病の薬なので、病気になった直後に服用するというより、数日経って来院した患者、あるいはこじれ慢性化した患者に使用の方がよりよいでしょう。たとえば、再発性あるいは慢性の扁桃炎、副鼻腔炎、中耳炎などはよい適応です。

他にも慢性気管支炎、気管支拡張症や非結核性抗酸菌症、肺結核、乳腺炎、癰・癤などにも応用可能で、もちろん抗菌剤と併用することも可能です。また、小柴胡湯と同様、頸部リンパ節炎や伝染性単核球症にも使用できます。特に扁桃炎の強い伝染性単核球症にはよい適応でしょう。小柴胡湯加桔梗石膏を慢性副鼻腔炎や慢性中耳炎などの慢性疾患に対して使用する時は、数週間単位で根気よく治療することが必要です。ちょうどマクロライド系薬の少量長期投与のような使い方になります。

鑑別

次に鑑別についてです。ごく初期の扁桃炎、副鼻腔炎等は葛根湯や麻黄湯、桂枝湯などの太陽病の方剤を選択することがベターです。もちろんこの時、炎症や化膿が強ければ桔梗石膏を加法することもできます。エキス剤にも桔梗石膏はありますので利用できます。ほかにも葛根湯加川芎辛夷、荊芥連翹湯、十味敗毒湯などがあげられます。葛根湯加川芎辛夷はベースが葛根湯ですが、特に鼻粘膜の肥厚を伴う鼻炎症状が強い場合に適応となります。荊芥連翹湯は、小柴胡湯加桔梗石膏とかぶるところがありますが、体質的に幼少期より鼻炎や扁桃炎、化膿疹などの化膿性疾患をくり返しているより難治性の患者に適応があります。十味敗毒湯も中耳炎や副鼻腔炎に使用されますが、もっぱら毛包炎、癰、蜂窩織炎、外傷後の化膿など皮膚疾患により適応があります。

以上、小柴胡湯加桔梗石膏に関して簡単に解説しました。最後にこの方剤はインターフェロン投与中のB型C型慢性肝炎・肝硬変の患者には間質性肺炎を合併することがありますので禁忌と考えた方がよいと思います。